日本医史学雑誌第四十三巻第四号
平成九年十二月二十日発行

平成九年七月十日受付
平成九年十月三日受理

ロブリー・ダングリソンの『医学事典』

——明治初年のわが国英米医学への貢献

深瀬泰旦

はじめに

明治新政府はドイツ医学を採用することを国是として決定した。明治二年（一八六九）太政官達をもってこれが布告されたことによって、日本全国津々浦々にいたるまでドイツ医学が浸透したようにかんがえられているが、実は急速な普及にはほど遠い状況であった。オランダ医学退潮の後をうけて、主流はむしろ英米医学であり、ドイツ医学一色に塗りつぶされるのは明治二〇年（一八八七）ころであることは、阿知波五郎によってすでに報告されている。[1] さらに幕末から明治初年にかけて、主としてアメリカ合衆国から来日した宣教医が、わが国の医学におよぼした影響もみのがすことができないことは、長門谷洋治によって指摘されている。[2] また地方医学校における状況をみても同様で、その一例として新潟医学校の場合は、基礎学としての英語や数学、究理学はすでに設立されていた新潟英語学校で教育するカリキュラムがくまれている。[3] さらに慶応医学校においても英語によって、英米医学が教育されていたことはよくしられた事実である。

このような潮流の中で、海軍病院[4]においてもイギリス海軍軍医アンダーソン William Anderson (1824-1900) やホイー

ラーEdwin Wheeler（1841-1923）の指導のもとでイギリス医学がおこなわれていた。ここに勤務していた奥山虎章が編纂した『医語類聚』は、手頃な英和医語辞典として医学界からおおいに歓迎されたものとおもわれる。本論では奥山虎章がこの辞書を編纂するにさいして、参考書として採用したダングリソンの『医学事典』について考察をくわえたいとおもう。

奥山虎章の『医語類聚』

英和医語辞典である『医語類聚』は、明治六年（一八七三）に名山閣から出版された。[5] 大きさは一二五ミリメートル×一七〇ミリメートル、表紙はハードカバーで、著者は海軍大軍医奥山虎章である。[6]

扉（図一）には英語と日本語の表題が付されており、右上部には"Okuyama"とローマ字で刻された虎の印章がおされている。左下部には所蔵者であったとおもわれる「高室」と刻された直径六ミリメートルの円形の印章がおされているので、この虎の印章は著者である奥山虎章の印章とかんがえられる。扉に著者自身の印章をおすことは和書の世界ではよくみられることなので、この習慣にしたがって明治以降の洋装本にも捺印したものとおもわれる。

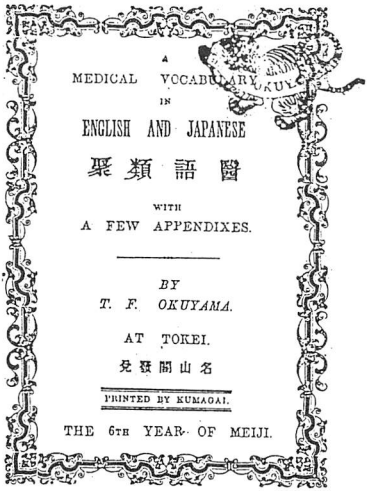

A
MEDICAL VOCABULARY
IN
ENGLISH AND JAPANESE
醫語類聚
WITH
A FEW APPENDIXES.
BY
T. F. OKUYAMA.
AT TOKEI.
奥山虎章
PRINTED BY KUMAGAI.
THE 6TH YEAR OF MEIJI.

図1　『医語類聚』（初版）の扉

本文の前には英文の序文、奥山虎炳の序文、著者の例言がおかれている。

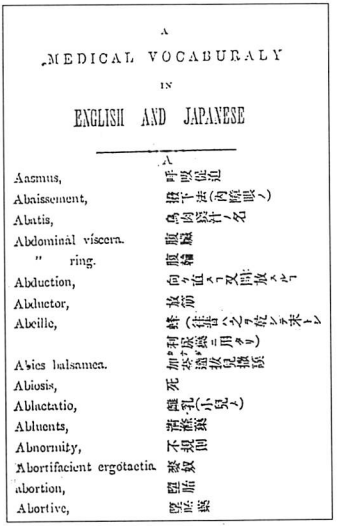
英文の序文では、医学の進歩がいちじるしいわが国ではあるが、学生のための医語辞典はまだ出版されていないので、解剖学、薬物学、生理学、病理学、外科、内科などの各分野の語彙を解説する辞

典の発刊を計画した。そこで当時すでに一七版をかさねておおいに珍重されていたダングリソンの『医学事典』や、その他の医学文献を参考にして本書を編纂した、とのべている。

英文の序文について、著者の実兄にあたる海軍大医監奥山虎炳の序文がある。ここでは外国語の解釈には辞書の存在は不可欠であるが、わが国の現状ではまだ有用な辞書を入手することはむずかしい。そこで「家弟章……専ラ動氏医学字書ニ就イテ、其ノ英ヲ摘ミ、其ノ華ヲ采」って本書を編纂した、とその経緯をのべている。

つぎの著者自身の例言にも同様な経緯がのべられている。「客歳会マ動氏医用字書ヲ得、之ヲ閲スルニ語原正確、注解明瞭トシテ大ニ得ル所アリ、乃チ欣然大喜千金不啻、因テ公務ノ余暇燈下寸光ヲ偸ミ、纔ニ一二語ヲ拾ヒ、傍ラ爾余ノ書中ヨリ手鈔シ、日ヲ追、月ヲ累ネ竟ニ一小冊子ニ満ツ」るにたる語彙をえたとあって、ここにも「動氏医用字書」を参考にしたことがのべられている。

これらの序文――とくに英文の序文――の"It is principally compiled from Dunglison's Medical Dictionary"とあることによって、「動氏医学字書」とはダングリソンの『医語事典』であり、奥山虎章が本書を編纂するにあたってこの辞典を参考にしたことを明らかにすることができた。



A
MEDICAL VOCABURALY
IN
ENGLISH AND JAPANESE

A

Aasmus, 呼吸迫
Abaissement, 堕下法(内障眼ヘ)
Abatis, 鳥肉等付ノ名
Abdominal viscera. 腹臓
" ring. 腹輪
Abduction, 向ヶ広ヘ又ハ開ク
Abductor, 外展筋
Abeille, 蜂(佳ヘ之ヲ充ツ)
Abies balsamea. 加利福尼亞産ニ用ヰル樹名
Abiosis, 死
Ablactatio, 離乳(小兒ヘ)
Abluents, 清潔藥
Abnormity, 不規則
Abortifacient ergotaetia. 墜産藥
abortion, 堕胎
Abortive, 堕産藥

図2　『医語類聚』(初版)の第1ページ

本文は一頁を二分し、左側には英語の単語を、右側には訳語である日本語の単語をおいている(図1)。日本語は横組みながら文字を横にたおして縦によむ。本文の辞書部分は二六八頁で、「方書略語之解」などの付録がふされて、すべては三二〇頁である。一頁は二三行であるが、訳語が二行、あるいは三行、ときには五行にわたる単語もあり、五五五二語が収載されている。

初版から五年後の明治一一年(一八七八)に、増訂第二版が出

版された。扉の表題は英文、邦文とも変化はなく、ただ「増訂」の二字がくわえられている。大きさは一二五ミリメートル×一八五ミリメートルと縦が五ミリメートル長くなった。表紙はやはりハードカバーである。

序文は著者自身の英文の「第二版の序」と、邦文の「聚引」の二編である。英文の序では

In the preparation of the present edition,……a number of important new words, has been introduced. But no remarkable change has been made in the general plan and arrangement of the book, with the intention that the bulk of the volume will not too much increased. The work is therefore, as before, essentially most convenient hand-book for the yong (sic) students.

とのべて、ダングリソンについてはまったくふれておらず、邦文の「聚引」でもダングリソンにはふれるところがない。二篇の序文の間には「人身骨格之図」をはじめ、「手術台」や「離被架」などの医療器具、「顕微鏡」や「聴診器」などの医療機器の銅版図が一二頁にわたってふされている。本文はおよそ六五頁増加して、三三二頁になった。単語は一六五〇語が追加されて、七二〇二語に増加した。第二版にも「方書略語之解」などのほか、あらたに三〇頁におよぶ薬剤の「服量表」が追加されて、付録は一〇一頁になった。

奥付によると、発刊は明治一一年三月二〇日で、訳者出版人として「山形県士族　奥山虎章　東京第二大区二小区桜田兼房町六番地」、発兌として「芝大神宮前　牧野吉兵衛」としるされている。著者あるいは編者といわずに、訳者としていることは奇異に感ぜられるが、ダングリソンの『医学事典』を翻訳して編纂した、と虎章自身が理解していたからであろうか。しかしダングリソンの辞書と『医語類聚』を比較してみると、その語彙数や語彙の解説に歴然とした差があり、とても翻訳書とはおもえない。

すなわち奥山本の本文二六八―三三二頁にたいして、ダングリソンの事典（一八七四年版）は一一三一頁と、およそ三―四倍の分厚さである。奥山虎章がダングリソンに収載されているすべての単語を採録したのでないことは、これをみて

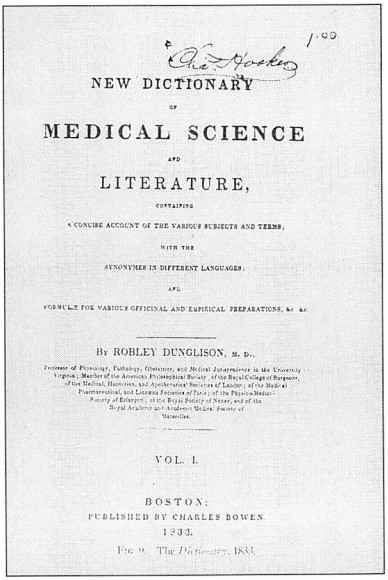
も明らかである。語彙の解説も奥山本は二―三行におさめられているのにたいして、ダングリソン本は一頁以上にわたる長文の解説をふした語は、inflammationやliverなど七五語におよぶ。ダングリソン本はまさに堂々たる医学事典であるのに比し、奥山本は単語帳ともいえる程度の辞書である。しかし英米医学が主流であった明治初年にあっては、医師や学生によっておおいに珍重されていたものとおもわれる。

ダングリソンの『医学事典』

生来文章をかくことを好んだダングリソンRobley Dunglison（1798-1869）は、多作な著述家である。著書としては*Human Physiology*や*Elements of Hygiene, Practice of Medicine*などがあるが、『医学事典』こそかれの最高傑作の書といえるであろう。

その初版は*A New Dictionary of Medical Science and Literature*の書名で、一八三三年にボストンのチャールズ・ボウエン社から二冊本として発刊された（図三）。アメリカ合衆国最初の医学辞典であるが、残念なことに質のわるい紙が使用されている。

一八三九年にリー・アンド・ブランチャード社から一冊本として第二版が発刊され、このとき書名が*Medical Lexicon : A Dictionary of Medical Science*とあらためられた。全巻八二一頁との記録がのこっている。以後一八六〇年の第一六版まで二―三年おきに改版され、一八六六年版（第一七版）からは出版社がヘンリー・リー社にかわった。


1·00

NEW DICTIONARY
OF
MEDICAL SCIENCE
AND
LITERATURE,
CONTAINING
A CONCISE ACCOUNT OF THE VARIOUS SUBJECTS AND TERMS;
WITH THE
SYNONYMES IN DIFFERENT LANGUAGES;
AND
FORMULÆ FOR VARIOUS OFFICINAL AND EMPIRICAL PREPARATIONS, &c. &c.

By ROBLEY DUNGLISON, M. D.,
Professor of Physiology, Pathology, Obstetrics, and Medical Jurisprudence in the University of Virginia; Member of the American Philosophical Society; of the Royal College of Surgeons; of the Medical, Humanitarian, and Apothecaries' Societies of London; of the Medical Pharmaceutical, and Licentia Practica of Paris; of the Physico-Medical Society of Erlangen; of the Royal Society of Naples; and of the Royal Academy and Academy Medical Society of Marseilles.

VOL. I.

BOSTON:
PUBLISHED BY CHARLES BOWEN.
1833.

FIG. 9. The *Dictionary*, 1833.

図3　ダングリソン『医語辞典』初版（1833年）の扉（文献（18）より引用）

つぎの第一八版（一八七四年）は長男のリチャード Richard Dunglison（1834-1901）[7] が改訂し、一九〇三年の第二三版はステッドマン Thomas Stedman（1853-1938）が改訂の手をくわえている。このころには一三七六頁となって、およそ七割の増頁となった（表一）。

第二三版をもって本書は終焉をむかえた。そして改訂者のステッドマンの手によって装いもあらたに、一九一一年に *A Practical Medical Dictionary* として出版された。これが一九九五年に第二六版が出版され、われわれがよくお世話になる、いわゆるステッドマンの『医学辞典』である。

ダングリソンがこの辞書を編纂した目的は、第二版の序文によると、そのころ医学用語や医学的事項に解説をくわえた医学事典の出版がもとめられていたので、その要望にこたえようとしてこの事典の編纂をくわだてたとある。語学の才能にたけていたダングリソンは、ギリシア語やラテン語などの古典語のみならず、ドイツ語やフランス語の語彙をふんだんに収録した辞書をつくろうとの野望をいだいて編纂に従事した。くわえて簡単な伝記的事項や書誌学的な事項についての記述もみられる。

この辞典にたいする当時の書評は、ダングリソンの「広範な知識、不屈の勤勉さ、広範囲にわたる探索」に賞賛の辞を呈している一方、きびしい批評もみられ、ダウラー Benett Dowler は「この辞書はAからZまで、日常よく用いられる単語や非専門的な単語がおおすぎる。新版の出版にあたってはこの点に訂正をくわえ、野卑な言葉や粗野な言葉ははぶく必要がある」と辛口の批判をくわえているという。[8]

初版は千部印刷され、著者の手には一二五〇ドルが支払われているが、出版社としては割に合わない出版であったにちがいないとダングリソンはかんがえて、以後の版は出版社を変更したいとの意向をもっていた。リー・アンド・ブランチャード社は、伝記的記述や文献事項を削除するならばとの条件を提示したので、ダングリソンはこれに同意して第二版からはこの出版社が版元になった。本書は初版から八版にいたるまでに一七二五〇部が出版され、一八六五年九月

表1　ダングリソン『医学事典』の変遷

版	出版年	書　　名	ページ	出版社
1	1833	A New Dictionary of Medical Science and Literature		C. Bowen
2	1839	Medical Lexicon	821	Lea & Blanchard
3	1842	〃	749	〃
4	1844	〃	771	〃
5	1845	〃	771	〃
6	1846	〃	808	〃
7	1848	〃	912	〃
8	1851	〃	927	〃
9	1852	〃	927	〃
10	1853	〃	927	〃
11	1854	〃	927	〃
12	1854	〃	927	〃
13	1855	〃	927	〃
14	1856	〃	927	〃
15	1857	〃	992	〃
16	1860	〃	992	〃
17*	1866	〃	1047	Henry C. Lea
18	1874	〃 (revised by Richard J. Dunglison)	1139	〃
19				
20				
21	1893	A Dictionary of Medical Science	1181	Lea Bros.
〃	1895	〃	1206	〃
22	1900	〃	1376	〃
23	1903	〃 (revised by Thomas Stedman)		

American Medical Imprints, 1820-1910 (1985) より作成
＊：文献（19）による出版年は、17版：1865年、18版：1866年、19版：1868年、20版：1874年である。

までに合計四四七五〇部が販売されたと著者自身がのべている。[9]

参考にした先行書についてダングリソンの記載はない。[10] ゲミル Chalmer L. Gemmill によると、ヴァージニア大学図書館の目録（一八二八年版）には、同図書館にカステリ、クーパー、フーパー、ニステンが編纂した辞書類やフランス語の医学辞典も架蔵されていたという。これらの辞書の伝記的記述や文献学的記述と、ダングリソンの記述とを比較検討して、とくにフランス語の医学辞典とかなり一致していると、ゲミルはのべている。[8]

以下いくつかの項目をえらんで、本書の特徴をさぐってみよう。

一、digestion「消化」

次項でのべるように、ダングリソンは消化生理学の分野で輝かしい業績をのこしたボーモントの研究に手をかしているので、まずこの領域の語彙として digestion をとりあげる。

見出し語の直後には、まずこれがみちびかれたラテン語がおかれている。ついで括弧内に語源的解釈がほどこされ、この語の由来が明らかにされている。「消化する」という意味のラテン語 digere あるいは digestum から digestio が造語されたことをしめしている。[11] つぎに coctio, coctio ciborum, pepsis, digestive process という四種の同義語がみえる。これにはつぎのような語解がくわえられている。

消化とは、消化管に摂取された栄養物質をいろいろな形に変化させる機能である。その目的は栄養物質をつぎの二つの部分に変化させることにある。一つは、回復力をもった液体部分――自然の営みによってたえず生ずる老廃物を再生するような機能をもっている――であり、他は栄養性をうしなって体内から排除されるべき部分である。消化は生体の一連の活動からなるが、それぞれの動物によって異なる。ヒトではその過程につぎの八段階がある。一、食物の認識　二、咀嚼　三、唾液と食物の混和　四、嚥下　五、胃の活動　六、小腸の活動　七、大腸の活動　八、

大便の排泄。

これにつづいて、別の意味でつかわれている「消化」を、つぎのように解説している。

消化とはまた製薬の一過程でもある。すこし高い温度――たとえば砂風呂の中においたり、しばらく日光にさらしておくなど――にして、ある固形物を水やアルコール、エーテル、酸などで処理することである。

元来この語は化学者から借用したものといわれている。かれらは実験室で物質に変化をおこすのとまったく同じ方法で、胃の中でも食物を処理できる考えていたからである。その一人であるファン・ヘルモント Jean Baptiste van Helmont (1577-1644) が、この語をよく使用していた。その意味で蛇足ともおもえるこの定義は、なかなか的を射た表現といえよう。

ダングリソンの医学事典の後継書をもって任じている現行のステッドマンの医学辞典の翻訳書では、digestion をつぎのように表現している。[12]「摂取された食物が、組織の合成またはエネルギー放出のための同化作用に適する物質に転換させられる過程」であるという。これを原著[13]についてみると、「摂取した食物を、組織の合成またはエネルギーの放出のための同化に適した物質に転換させる機械的、化学的、酵素学的過程」とあって、一層理解しやすい表現である。

二、coction「煮熟」

つぎに消化と同義語としてあげられている coction についてみてみよう。現代の医学辞典にはこの語はみられない。[14]しかし『ヒポクラテス全集』には、この術語が使用されており、[15]古くから医師には馴染みのある語であった。それを反映して、ダングリソンの事典にはつぎのような表現がみえる。

この語はいろいろな意味に用いられている。一、古代では消化管、とくに胃において生じた食物の特別な変化、すなわち何ら手をくわえられていない状態からの加工を意味した。二、成熟、あるいはある種の変化――液体病理学者によって信じられている、病気をひきおこす原因が排除される以前におきる変化――をあらわす。これは激しい

疾患の際におきると考えられており、「煮熟期」とよばれていた。

液体病理学者たちは、病原物質が crudity, coction, evacuation の三段階をへて変化していくと考えていた。すなわち「排出」される以前の状態が「煮熟」であり、その時期を「煮熟期」と名づけた。さすが医史学に通暁していたダングリソンならではの解説であるが、現代のわれわれにはなかなか理解が困難な語彙である。『オックスフォード英語辞典』には now rare と、現代では稀にしか使用されないことがしめされている。

三、gastric juice「胃液」

消化生理学の研究史上、最初の、もっとも中心的テーマであった gastric juice についてみてみよう。ここには succus gastricus, menstruum ventriculi, fermentun ventriculi, suc gastrique, gastric acid の五種の同義語があげられている。

胃の粘膜から分泌される液体。よく経験するように、胃から分泌された液体と、横隔膜の上部にある消化管の分泌液の混合物である。そのような混合物なので、もっとも対照的な性質があらわれる。消化のさい、強力にはたらくこのような液体が分泌されることはおおくの研究によって明らかであり、著者や他のおおくの人びとによってはっきり証明されている。ヒトでは塩酸と酢酸がふくまれていることは、著者によって発見された。これらの酸は、酵素であるペプシンと関連がある。急死した患者の胃液は腐敗し、胃を穿孔することがある。これは法医学上、興味ある問題を提起している。

自らが関与して研究した胃液中の遊離塩酸の存在を、「発見した」と表現しているが、実は胃の塩酸はダングリソン以前の一八二四年に、イギリスの医師トラウト William Trout（1785-1850）によってすでに発見されていた。のちにのべるように胃液についてのボーモントとの共同研究は、ダングリソンにとってあまりよい思い出ではなかったが、控えめながらもその業績に一言ふれないわけにはいかなかったのであろう。

四、measles および rubeola「麻疹」

つぎに小児期にみられる発疹性疾患についての記述を検討してみよう。まず「第一病」ともいわれているmeaslesでは、rubeolaをみよとの一語しか記載がない。ヒトの疾患とはまったく関係のないブタの條虫症についての記述がこれにつづくだけである。

そこでrubeolaをみると、先のmeaslesよりもかなり詳細な記述である。この時代は現在とは異なって、rubeolaの方が繁用されていたことがわかる。まず「わたしは赤い」という意味のrubeoからこの語は派生したことをしめし、これにつづいて二五語にもおよぶ同義語があげられている。このなかにはスコットランド方言など地方語がいくつかふくまれているのは、ダングリソンが語学の才能にめぐまれていたことをしめしている。

おもな発疹性疾患の一つ。だれもが罹患するが、一度に限られている。特別な感染(contagion)によって発症する。発疹は普通、第四病日に生ずるが、あるいは発熱後第三日、第五日、第六日のこともある。発疹は四日間持続したのち、解熱とともに次第に減退する。本症は感染をうけてから一〇日から一四日に発症する。発疹ははじめ、赤く、はっきりした、ほぼ円形の点をしめし、ノミの刺し傷よりいくぶん小さい。数が増加するにしたがって、癒合して不整形の小さい斑を形成するが、半円形あるいは半月形に近づく。これらの斑点は、周囲に単独の円形の斑点や正常な皮膚が介在している。……発疹の消退後に表皮の落屑がみられる。麻疹そのものは危険ではないが、冬期には肺炎を、夏期には下痢(dysentery)をおこしやすく、これによって時には生命の危険がともなうことがおおい。これらは発疹が消失すると同時に、あるいはその直後に発症することがおおく、その場合には特別な疾患として治療しなければならない。麻疹には一般的な抗炎症治療が必要である。Hallierによって真菌の一種*Mucor mucedo*が患者の血液や喀痰から発見されている。

感染や下痢に上記のような術語を使用していることは、現代の医学からみると奇異の感をうけるが、むしろ当時の医学的思考の内容をあらわしているととらえた方が妥当であろう。落屑がみられたり、色素沈着にふれていないなど、病

状経過の記述は今日の医学とおおいに異なるところがあるが、これも医学の進歩とみた方がよいであろう。ハリアーの発見した真菌が、麻疹の病原体でなかったことはいうまでもない。

五、rubella「風疹」

つぎに麻疹類似の疾患として有名なrubellaをみると、これも語源はrubeoであるといい、九語の同義語があげられている。このなかにはGerman measles, Rothelnなど馴染みの語がみえる。

麻疹に似た発疹症の一種。ときに猩紅熱に似て、黒ずんだ赤色の発疹が均一に分布する。カタル症状はなく、感染しない。予後はきわめてよい。麻疹と猩紅熱が混在しているとかんがえる人もいる。はじめは天然痘と混同されていた。Hildenbrandによってrubeolaとよばれていたが、この語はイギリスやアメリカでは、ふつう麻疹に限定されている。

これでは風疹と麻疹の症状の差異が浮彫にされていない。風疹を麻疹とは別の疾患として記載したのはドイツのゼンネルトDaniel Sennert（1572-1637）である。それが一六一九年のことなので[16]、本来ならもっと明確な表現の記述も可能であろうとおもわれるが、この二病の鑑別がいかに困難であるかという事実をしめしているといえようか。ここにあるヒルデンブラントとは、発疹チフスに古典的な分類をこころみたオーストリアの医師Johann Valentin Hildenbrand（1763-1818）であろう。さらにこれに「第三病」ともいわれている「猩紅熱」がくわわると、問題は一層複雑になる。

六、scarlatina「猩紅熱」

scarlatteは「深紅色」という意味のラテン語である。同義語はさらにおおく、二一語におよぶ。

猩紅熱の特徴的な症状は、発熱第二日ころに顔面や頸部、口腔にあらわれる深紅色の潮紅で、これが急速に全身にひろがり、第七日に終わる。おおきく二種類にわけられる。scarlatina simplex, s. febris, s. benigna, s. sine anginaなどで、落屑、ごくかるい虚脱でおわる。他はs. anginosa, s. paristhmitica, s. cynanchica, s. mitior, Fothergill'

s sorethroat で、高熱を発し、咽頭には潰瘍が生じ、ついで発疹があらわれ、広範囲にわたることなくしばしば土け色にかわる。最重症形の s. maligna, s. gravior もこれに属し、Cullen の悪性咽頭炎と一致する。猩紅熱は主要な発疹性疾患であり、主として小児の疾患である。発疹は麻疹のそれと異なり、表皮に落屑はみられない。麻疹もまたカタル症状をともなうが、一方猩紅熱の合併症は咽頭炎である。本症にはつよい感染性があるとみられるが、疑わしい点もある。発酵病の原則にしたがって、William Farr が猩紅熱と命名した。単純な猩紅熱では、治療はさして必要ではないが、抗炎症性の治療でなければならない。……

このころ流行していた猩紅熱は重症化することがおおく、むしろ麻疹より予後の悪い疾患としておそれられていた。それだけに記載が詳細にわたっているのであろうか。症状については「麻疹のそれとは異なり、表皮に落屑はみられない」と、今日われわれが理解している両者の症状とはまったく正反対の表現である。ここにあるカレンは、臨床講義や治療学の開拓者として名高いエディンバラ大学の内科医 William Cullen (1710-1790) であり、ファーはイギリスの人口動態統計の創始者として名高い William Farr (1807-1883) である。現在では猩紅熱の命名者は、「イギリスのヒポクラテス」とたたえられたシドナム Thomas Sydenham (1624-1689) であるといわれている。

ダングリソンは医史学に造詣が深かった。学生に講義をおこない、死後にそれが専書として出版された[17]。また医学教育上、医史学の重要性をつとにみとめて、カリキュラムの中に位置づけた[18]。しかしかれの医学事典に医史学的記述はほとんどみられない。ヒポクラテスやガレノスについてその項目はあげられておらず、形容詞として使用している facies Hippocratica「ヒポクラテス顔貌」があげられているにすぎない。ガレノスについても同様で、Galenic medicine や Galenism があるだけである。ダングリソンが編纂した辞書としては、物足りない感じをぬぐえない。

ダングリソンの消化生理学への貢献

消化生理学の歴史的推移をみると、ある時期は化学的発酵あるいは沸騰という考え方が主流をしめていたことがある。すなわち消化の化学的変化説である。しかしそれが胃液にふくまれる物質によっておこなわれるとはいっても、その本態が何であるかについては解明されていなかった。胃液の作用よりも、唾液そのものに消化を促進する何ものかがふくまれているとした時代もあった。

またある時期には、胃にはいった食物が機械的に粉砕されて消化されると考えた。消化は胃という攪拌器、あるいは粉砕器による食物の単なる粉砕であり、それによって糜粥といわれている乳状の塊に変化させるにすぎないと考えたのである。時代は消化の化学変化説にかたむいてはいたものの、胃液中の遊離塩酸や消化酵素の存在が明らかにされるのは、一九世紀をまたなければならなかった。

一八三三年早々にダングリソンは、アンドリュウ・ジャクソン大統領の私設秘書をつとめていた友人のトリスト Nicolas Trist（1800-1874）をつうじて、初代の陸軍軍医総監ラヴェル Joseph Lovell（1788-1836）からボーモントの実験に参加するようにとの依頼をうけた。[19]

マスケット銃による偶発的な外傷の結果、胃に瘻孔をつくったフランス系カナダ人サン・マルタン Alexis St. Martin（1797-1880）について、陸軍軍医のボーモント William Beaumont（1785-1853）が詳細な研究をおこなっていた。一八二二年六月のある日、一九歳のサン・マルタンは三フィートの至近距離から腹部に貫通銃創をうけた。近くの砦からかけつけたボーモントの懸命の治療によって一命はとりとめたものの、周囲二インチ半ほどの胃瘻がのこってしまった。ボーモントは一八二五年からこの瘻孔をとおして食物を摂取したときの胃の運動や、正常の胃の粘膜の外観、食物を摂取したときにかぎって胃液が分泌されるという事実、さらには胃の内部での消化の状況を観察した。[20]

「発酵」という言葉は胃の内部でおこっている変化をさす術語としてもちいられていたが、それがふくむ意味についてはかなり曖昧なものがあり、一六―一七世紀にはおおくの混乱がみられていた。気まぐれな錬金術の時代を反映して、空理・空論が横行していたのである。一八世紀にいたってレオミュール René Antoine de Réaumur (1683-1757) やスパランツァーニ Lazaro Spallanzani (1729-1799) のすぐれた研究によって、この領域で長く支配的であった粉砕説がしりぞけられ、いわゆる腐敗説や発酵説にも打撃をあたえていた。しかし近代化学の勃興という時期をまたなければ、消化生理学の正しい知識への到達は困難であった。[21]

ボーモントにとっては貴重な実験試料であるが、観察されるサン・マルタンは「人間試験管」であることをきらっていた。この両者の間には感情的な軋轢があり気まずい関係が持続していたので、このような関係で実験を継続することはボーモントにとってもかなりの忍耐を必要とした。ボーモントはいやがるサン・マルタンをなだめたり、すかしたりしておこなった研究の成果をまとめて、ラヴェル軍医総監の校閲をへて一八二五年に論文を発表した。[22]

徒弟として医学教育をうけたにすぎないボーモントは、それ以上の実験をどの様にすすめていったらよいのか見当がつかなかったので、ラヴェルに助力をもとめた。[23] そこでラヴェルからダングリソンへの要請となったのである。ダングリソンは首都ワシントンにおもむいてこの実験に参加し、ボーモントにおおくの助言をあたえた。ボーモントは採取した胃液の化学分析を、ダングリソンとイェール大学のシリマン Benjamin Shilliman (1779-1864) に依頼した。ダングリソンは胃液の主な内容は塩酸であること報告した。シリマンも同様な結果をえたが、かれは自らの結果に満足せず、資料をスウェーデンの有名な化学者であるベルツェリウス Jöns Jakob Berzelius (1779-1848) にもおくるようにと依頼した。[24] ボーモントは、胃液の中にはこのほかにも消化作用をもった第二の物質が存在することを示唆している。これがのちにシュワン Theodor Schwann (1810-1882) によってペプシンであることが証明された(一八三五年)。当時の化学分析のレベルでは、いろいろな消化物質の分析は不可能であったが、この二人の研究によって今日の消化生理学の第一歩

がはじめられたといえよう。[25]

ボーモントが自らの著書として出版したので、[22] ボーモントの業績として評価されるのは当然であるが、ダングリソンはボーモントの対応が疎略にすぎると感じていた。[26] ボーモントはダングリソンへの感謝の意をあらわすにあたって、他の人びとと同列においたごく普通の表現をもちいているにすぎない。ダングリソンとエメット John Patten Emett (1796-1842)[27] がおこなった胃液の化学的分析を引用しながらもそのことにはふれず、胃液の顕微鏡的検査に関与したことに言及しているだけである。[28]

このようなことは往々にありがちではあるが、消化生理学の歴史を種々の医史学の成書についてみるとき、ボーモントの名はあげられているにもかかわらず、ダングリソンの名を見出すことができないという事実を目の当たりにすると、ダングリソンの非難もあながち独りよがりではないといえよう。

医学教育者としてのダングリソン[29]

ダングリソンはイングランドの湖水地方のケスウィックで、一七九八年一月四日に生まれた（図四）。おじにあたる人が西インド諸島で果樹園を経営して成功していたので、そこの後継者になることをのぞんでいたが、そのおじが死亡したためにこの希望を放棄してしまった。

その後ダングリソンは医師になることをこころざして、一七歳のときにケスウィックの外科医であるエドモンソン John Edmondson の徒弟にはいった。ついでロンドンにでて、優秀な産科医ヘイドン Charles Haden (1786-1824) の助手になった。ヘイドンからは医学知識を学んだばかりでなく、音楽にたいする興味もうえつけられた。

医学学習の意欲にもえたダングリソンは、エディンバラ大学にまなんだ。このころエディンバラは医学教育の中心地としてロンドンをしのいで、その名はヨーロッパ中にしれわたっていた。ロンドンでは正規の医学教育はおこなわれて

おらず、それにかわって病院の医師が生徒をあつめて病院で教育をおこなっていた。再びロンドンにかえったダングリソンは、ガイ病院勤務のクーパーAstley Cooper（1768-1841）の解剖学の講義をうけた。

ついでダングリソンは、一九世紀前半の医学教育のメッカであるパリに留学した。パリはまさに臨床医学の精華が見事に花ひらいていた。自らの発明した聴診器を駆使して診断学の大成を目論んでいたラエンネックRené Theophile Laennec（1781-1826）は、その一例である。ダングリソンはエディンバラやパリに留学したことによって、後年かれが医学教育に情熱をかたむけて、「アメリカ最高の医学教育者」といわれるようになる道がひらかれたといってよいであろう。

図4　ロブリー・タングリソン
（文献(18)より引用）

ロンドンにかえって一八一八年に、ロンドン王立外科学会とロンドン薬剤師協会から免許を取得して開業医生活にはいった。開業医として活躍していたダングリソンのもとに、トマス・ジェファーソンの使者としてアメリカからギルマーFrancis Walker Gilmer（1790-1826）が、ロンドンに到着したのは一八二四年のことであった。

アメリカ合衆国の第三代大統領を退任したジェファーソンは、ヴァージニア大学創立にあたって、内科と解剖学、さらには医史学など多方面の領域にわたって講義を担当しうる教授をもとめた。[18]この方針にそって人選がすすめられたが、アメリカ生まれの医師には適任者はいなかった。そこでより「高い科学知識、教師としての資質、品行方正な人格と倫理性をもった」[30]人物を海外にもとめて、ギルマーをイギリスに派遣した。ギルマーから相談をうけたバークベックGeorge Birkbeck（1776-1841）――ロンドン力学研究所創立者の一人――は、それに相応しい人物としてダングリソンを推薦し、ギルマーとダングリソンの間に、ヴァージニア大学において解剖学、外科学、医史学、生理学、薬物学、薬理学な

どの講義をおこなう契約――年俸千五百ドルと学生一人について二五―五〇ドルの授業料の徴収、そして庭付き住宅の無償貸与――がむすばれた。

ヴァージニア大学は一八二五年三月七日に、六八名の学生で開学するが[31]、それに先立つことおよそ一ヶ月、ダングリソンは前年に結婚した新妻とともにアメリカにわたった。

ダングリソンはその後アメリカ合衆国において、四五年の長きにわたってメリーランド大学、フィラデルフィアのジェファーソン医科大学などで解剖学、薬理学、生理学などの講義をおこなっている。医学教育の分野において、とくにわすれることのできない人物である。

この間に学生の講義用のテキストとして、一八二三年に *Human Physiology* を出版した。これは高い評価をえて、一八五六年までに七版をかさねた。このほかにも数多くの著作を出版し、几帳面で論理的な記述によって医学事典を編纂したが、これは医学生時代からの性格にねざすもので、かれがエディンバラ大学の学生時代にとった講義ノートを分析したジョーンズらは、このころから論理的な思考と編集者としての勤勉さをあわせもっていた、とのべている[32]。

一八二四年から一八三三年までアメリカで最初の医史学の講義もおこなっており、これが死後、息子リチャードの手によって編集され、一八七二年にフィラデルフィアのリンゼイ・ブラキストン社から *History of Medicine* として出版された[17]。リチャードの序文によると、これらの講義をおこなうにあたって参考にした文献は、フレインド John Freind (1675-1728)[33] やシュプレンゲル Kurt Sprengel (1766-1833)[34] などの医史学の成書であったという。

現在われわれがよく参考にするノイブルガーやガリソン、カスティリオーニ、シンガーなどの成書は、このころまだ出版されていない。ダングリソンの『医学史』は二八七頁という薄手の書物ではあるが、ひろい視野から医史学をながめており、とくにヒンズー医学、中国と日本の医学、シジア医学、ケルト族の医学など、現在でも西欧の医史学書がとりあげないような話題に言及しているので、アメリカで最初の医史学書としておおいに歓迎されたにちがいない。後年

のことではあるがガリソンはその著書で「素晴らしい医史学書」と賞賛している[35]のは、この間の事情をあらわしているといえよう。

ガリソン・モートンの医学文献集にはダングリソンの文献としては *Practice of Medicine* がただ一書あげられているにすぎない[36]。モートンは別の著書ではダングリソンについて、「イギリス生まれの、アメリカ最初の専任の医学教授。生理学の教科書や医学辞典、医史学についてのアメリカで最初の著者[37]」とのべている。さきの文献集の記述との不一致は、いかにも残念といわざるをえない。

医学教育面ばかりでなく、ダングリソンは歴代大統領の主治医としてかれらの治療にたずさわり、その臨終にも立ち会っている。かれをアメリカに招請したジェファーソンはもちろんのこと、第四代ジェイムズ・マディソン、第五代ジェイムズ・モンロー、第七代アンドリュー・ジャクソンがかれの患者である。

ダングリソンは中肉中背で、ちぢれ毛のハンサムな男であった。もっとも後年になると恰幅がよくなり、すこし太り気味にはなったが……。一八六八年の春には健康を害して教授職を辞しており、最終講義は毎年の最後の講義と同様「死について」であった[30]。翌一八六九年四月一日に大動脈弁の疾患で死亡した。解剖の結果かれの脳は、平均値よりも五オンスもおもかったという[38]。

おわりに

奥山虎章の『医語類聚』とダングリソンの『医学事典』を比較検討した。奥山本がたとえ単語帳ほどの分量であったとはいえ、明治初年のわが国の英語医学の学習上に果たした貢献は、けっしてすくなくなかった。

またダングリソンの経歴と、かれがアメリカ合衆国の医学教育においてきづいたおおくの業績についてもふれた。

本論文の要旨は一九九六年六月二二日札幌における第九七回日本医史学会総会、および一九九七年一一月二三日洋学史学会例

会において発表した。

稿をおえるにあたりご指導、ご助言をいただいた酒井シヅ教授に感謝する。

注と参考文献

(1) 阿知波五郎「明治初期英米系医学訳書原著とその性格」『日本英学史研究会研究報告三七号』 一―一六頁 昭和四〇年
(後に「明治初年の英語医学辞書」および「明治初期の英語医学――英米医学訳書の原著とその性格」として『近代日本の医学――西欧医学受容の軌跡――』一九八二年 思文閣出版に収録)

(2) 長門谷洋治「近代日本における外人宣教医の研究」『日本医史学雑誌』一六巻 一―四四頁 昭和四五年

(3) 新潟大学医学部学士会編『新潟大学医学部七十五年史』上 七七―七八頁 平成六年

(4) このころの海軍病院は診療部門だけでなく、海軍全般の医療衛生面の行政・管理部門をあわせもっていた。奥山虎章はここに勤務し、またここでおこなわれていたホイーラーの講義の翻訳や通訳にあたっていた。

(5) わたくしの所蔵する初版本は奥付を欠いているので、正確な発行日は不明である。扉や序文から明治六年であることをしるにすぎない。

(6) 奥山虎章についてはつぎの文献にくわしい。深瀬泰旦「『医語類聚』の著者 海軍大軍医奥山虎章」『日本医史学雑誌』四二巻 二九―四七頁 平成八年

(7) リチャード・ダングリソン(一八三四―一九〇一)はロブリーの三男(第四子)で、一八五八年にジェファーソン大学を卒業した医師である。

(8) Gemmill, Chalmer L.: Robley Dunglison's Dictionary of Medical Science. 1833. *Bull. N. Y. Acad. Med.* 48: 791-798 1972

(9) ゲミルの前掲論文にのる出版年と、文献(19)にふされた脚注(一四七―一四八頁)にある出版年とはわずかながら差異がみとめられる。表一にその差異をしめした。

(10) 本書の序文にはふれていないが、自伝には「このころ医学生が唯一使用しうるのはフーパーの辞典であるが、これは月並みな辞典で、二〇年間もほとんど改訂の手がくわえられていなかった」としるされている[文献(19)四四頁]。

(11) 術語を語源にさかのぼって解説をくわえるという手法は、本書の後継書といわれているステッドマンの『医学辞典』にも継承されている。

(12) 『ステッドマン医学大辞典』改訂第三版　メジカルビュー社　一九九二年。本書は原著第二五版（一九九〇）の翻訳書である。

(13) *Stedman's Medical Dictionary*. 26th ed. Williams & Wilkins 1995

(14) 『オックスフォード英語辞典』には記載があるものの、手許の英和辞典や医語辞典には収載されていない。*Dorland's Illustrated Medical Dictionary* (28th ed. 1994) ただ一書にみられるが、ごく簡単に「煮沸の過程」と「消化」と記されているにすぎない。

(15) 『ヒポクラテス全集』では「古い医術について」（第一八節および第一九節）において使用されている。これを小川政恭訳や大槻真一郎訳では「煮熟」、今裕訳では「煮沸」と翻訳している。小川政恭訳「古い医術について」『古い医術について』五九―八四頁　岩波書店　昭和四三年。大槻真一郎訳「古来の医術について」『ヒポクラテス全集』六九―九六頁　エンタプライス　一九八五年。今裕訳「古代医学」『ヒポクラテス全集』一九―三六頁　岩波書店　昭和六年　複刻版　名著刊行会　昭和五三年

(16) 深瀬泰旦「病名の由来　風疹」『メディカル・テクノロジー』一七巻　一一九九頁　一九八九年

(17) Dunglison, Robley : *History of Medicine from the Earlist Ages to the Commencement of the Nineteenth Century*. Arranged and Edited by Richard Dunglison. Linsay and Blakiston, 1872

(18) Gemmill, Chalmers L. : The Educational Work of Robley Dunglison, M. D. at the University of Virginia. *Virginia Medical Monthly* 87 : 307-309 1960

(19) Radbill, Samuel X. ed. : The Autobiographical Ana of Robley Dunglison, M. D. *Trans. Amer. Phil. Soc.* 53 : 8 : 1-212 1963.この論文の五〇頁に記載されている。

(20) 一九歳で受傷したサン・マルタンは胃瘻をもったまま、一八八〇年に八三歳の高齢で死亡した。ウィリアム・オスラーはこの貴重な患者の遺体を、あるいはそれが無理ならせめて胃だけでも病理解剖させてほしいと熱心にねがったが、遺族の反対にあってかなわなかったという（Mettler, Cecilia C. : *History of Medicine*. p. 161 Blakiston 1947）。

(21) 川喜田愛郎『近代医学の史的基盤』下　六七九頁　岩波書店　一九七七年

(22) 一八二五年にまずラヴェルの名で一編（*Medical Recorder*：8:14）、ついでボーモント自身の名で一編（*Ibid.* 8：840）、そして翌年につぎの一編 Beaumont, William：Further Experiments on the case of Alex San Martin. *Medical Recorder* 9:94-97 1826 を発表した。のちこれらに加筆して出版したのが、つぎの専書である。*Experiments and Observations on the Gastric Juice, and the Physiology of Digestion.* F. P. Allen, 1833

(23) 生理学者としても名高く、また生理学史にも通暁していたフルトン John Farquhar Fulton（1899-1960）はつぎのようにのべている。

ボーモントが、かれ以前におこなわれた業績にたいする知識をもたずにこの観察をおこない、先人の業績とはまったく無関係にその発見をなしとげた、というのはおそらく正しいであろう。しかしながらかれの専書では見事な歴史的議論を展開している。観察ははるか以前におこなわれているので、専書を執筆するにあたって歴史的議論の部分を準備したにちがいないと考えられる。

Fulton, John F. ed.：*Selected Readings in the History of Physiology*. p. 139 Charles C. Thomas 1930

(24) Flexner, James T.：*Doctors on Horseback, Pioneers of American Medicine*. p. 217-264 Dover 1969,しかしベルツェリウスからの返答はなかったという。

(25) Duffy, John：*From Humors to Medical Science, A History of American Medicine*. 2nd ed. p. 109-110 1993

(26) Radbill, Samuel X.：The Autobiographical Ana of Robley Dunglison, M. D. *Trans. Amer. Phil. Soc.* 53：8：1-212 1963.この論文の五二頁に記載されている。

(27) エメットは一八二五年にダングリソンと同じ条件でヴァージニア大学博物学教授に就任し、一八二七年化学と薬物学の主任教授に昇進した。Moll, Wilhelm：University of Virginia's "Firsts" in the History of Medical Education. *Virginia Medical Monthly* 95：158-161 1968

(28) ボーモントの依頼をうけたダングリソンは、同僚のジョン・エメットと共同で、胃液の化学的分析とともに、胃液やいろいろな食物からできた糜粥の顕微鏡的検査をおこなっている。Bylebyl, Jerome J.：William Beaumont, Robley Dunglison, and the Philadelphia Physiologists. *J. Hist. Med.* 25：3-21 1970

(29) ダングリソンの経歴と著作については、ここに引用したおおくの文献にくわしく記載されているが、さきにあげたかれ自身の著作［文献（19）］がもっとも基本的な文献といえよう。ほかに *Dict. Nat. Biogr.* 6 : 198, 1973 および *Dict. Scient. Biogr.* 4 : 251-253, 1971 がある。

(30) Radbill, Samuel X. : Robley Dunglison, M. D. 1798—1869 American Medical Educator. *J. Med. Education* 34 : 84-94 1959

(31) 文献（30）によると「このうち二〇名が、ダングリソンの講義する七科目をとった」とあるが、文献（18）では「医学部に登録した学生二〇名でヴァージニア大学は開学した」とある。

(32) Jones, Mary and Chalmer Gemmill : The Notebook of Robley Dunglison, Student of Clinical Medicine in Edinburgh, 1815-1816. *J. Hist. Med.* 22 : 261-273 1967

(33) フレインドの著書は *The History of Phisick, from the Time of Galen to the Beginning of the Sixteenth Century.* London, 1725-26 である。

(34) シュプレンゲルの著書については序文に「ある部分、とくにもっとも初期の国家の医学の進歩の歴史については、今世紀のはじめに出版されたシュプレンゲルのすばらしい史書 *Geschichte der Arzneykunde* から翻訳や、要約をおこなった」とある。これは *Versuch einer pragmatischen Geschichte der Arzneikunde.* Halle, 1792-1803 であるとおもわれる。

(35) Garrison, Fielding : *An Introduction to the History of Medicine.* 4th ed. p. 885 W. B. Saunders, 1963

(36) Morton, Leslie T. : *A Medical Bibliography.* 4th ed. p. 626 Gower, 1983

(37) Morton, Leslie T. & Moore, Robert J. : *A Bibliography of Medical and Biomedical Biography.* p. 47 Scolar Press, 1989

(38) *Dict. Nat. Biogr.* 6 : 198, 1973

（順天堂大学医学部医史学研究室）

Robley Dunglison's Medical Lexicon and its Contribution to Japanese Medicine in the Meiji Era

by Yasuaki FUKASE

Dr. Torahumi Okuyama, the medical officer of the Japanese Navy, referred chiefly to Dunglison's Medical Lexicon : A Dictionary of Medical Science, when he compiled his English-Japanese dictionary of medicine in the early Meiji era. Medical Lexicon was published in 1833 as the first medical dictionary in the United States of America and the last, 23rd, edition in 1903.

Dunglison's purpose of compiling was in accordance with his preface to the second edition : "the Author's object has not been to make the work a mere lexicon or dictionary of terms, but to afford, under each, a condensed view of its various medical relations, and thus to render the work an epitome of the existing condition of medical science."

In its preparation he freely availed himself of not only the Greek and Latin works of the same nature, but also the English, French, and German works. It included a brief biography and the bibliographical writings.

Much praise was then given to this lexicon. However, incisive criticism, containing a lot of words using in daily life and non-terminlogy, was given. But the lexicon may have been available to many doctors and medical students in both the U. S. A. and Japan, where English-American medicine had become the main current in the early Meiji period.